



編集・発行 山見妙勢能報
日蓮宗 能勢妙見山 広報部
〒563-0132 大阪府豊能郡野間中
電話 072-739-0329
FAX 072-739-2883

初一念(しよいちねん)

倉橋 観隆

ある大きな森のお話。そこには様々な草花や木々が生い茂り、たくさんの動物たちが平和に暮らしていました。

ところがある日、突然火事が起こりました。さあ大変。動物たちは一目散で森の外へ逃げ出します。でも草木は逃げられません。次々に焼かれて行きます。そんな中、一羽のオウムがまさに燃えさかる炎の方に向かって飛んでいくではありませんか。仲間はいいました。「オウムくん、そっちへ行ったら焼け死んでしまいうよ」オウムは答えました。「わかってる。でも草

木のみんなは逃げられない。みんな焼け死んでしまいう。少しでもボクの力で火を消したいんだ」

よく見るとオウムの体は濡れています。羽に着いた水滴をバタバタさせて火にかけているではありませんか。水を落とすと今度は川の方へ飛んで行きます。頭からザブンと飛び込み全身が濡れて、また森に向かって飛んで行き、羽をバタバタ。何十回、何百回と繰り返し続きます。でもそんなことで火は消えません。とうとうオウムは力尽きて地面に落ち、息絶えてしまいました。

と、その時です。空が一天にわかにかき曇り、バケツをひっくり返したような

雨が降り出しました。その雨で次々と火が消えていったのです。

実はその雨、オウムの姿を見た天の神様の感動の涙だったのです。それは他の仲間が「そんなことどうせ無理」と決めてかかる中、オウムは森の仲間を思い、「出来るか出来ないかではなく、無駄かもしれないけれどボクはやれるだけやるんだ」という覚悟に神様は

感動したのです。

私達は往々にしてやる前から結果を想定して「出来るか出来ないか」と考えるがちです。しかし大切なのは「やるかやらないか」の覚悟ではないでしょうか。最初のこの覚悟を「初一念」といいます。節分を迎える今月、新たな年のスタートです。何か目標を決め「初一念」で過ごそうではありませんか。

《法華經に学ぶ現代》

〜純智庵〜

佛智は

思議し

回し

汝今

信力を

出して

忍善の中に

住せよ

『從地涌出品第十五』

春は近いがまだまだ寒い

だけどご覧よ草や木は

健気に新芽を膨らませ

時の来るのを待っている

思議し難きは自然の知恵か

仏の教えがそこに在る

忍善こそはいのちの素ぞ

信じるパワーが春を呼ぶ

【2月の主な行事】

☆節分星祭祈禱 3日(土)

◎一年間の息災開運を祈り、午前九時より深夜まで祈願法要

☆国権会・お火焚祭り 11日(祝)

10時 国権会法要

10時半 お火焚祭り

11時半 車両交通安全祈禱

火伏守り授与・大根炊き供養

※ケーブル&リフト臨時運行

★月例祈願法要 15日(木)13時

★鷗様月例祭 22日(木)15時

※2月の写経ならびに茶論はお休みです

【3月の行事予定】

☆報恩大祈禱会 4日(日)10時半

荒行僧出仕。水行、特別加持祈禱を行います

※ケーブル&リフト臨時運行

★写経会 11日(日)11時

★月例祈願法要 15日(木)13時

願い事を書いた兜矢を献納

★星嶺演奏会 18日(日)11時

星嶺で聞くミニコンサート

★鷗様月例祭 22日(木)15時

《送迎車のご案内》

御祈禱・回向を受けられる方は、

能勢電鉄「妙見口駅」〜妙見山上の間を能勢妙見山から送迎車を出します。

但し事前予約が必要です。妙見山事務所まで。

知恩報恩

箕浦 溪介

振り返るともう二年も前の話になる。私は大学四年間の生活を日蓮宗の総本山である、身延山久遠寺の寮で過ごした。今思えば大変貴重な経験をさせてもらえた振り返ることができが、当時の私はそんなことを考えている余裕はまったくなかった。

毎日の勤行はもちろんのこと、広大な境内の掃除、諸先輩方からのたくさんの御指導など、そんな日々が休みなくほぼ毎日続くのである。そんな生活をしながら、お寺に隣接する大学に通うのであるから、受講態度はひどいありさまである。

そんな四年間の僧道生活の中で特に影響を与えてくれたのが指導期間と呼ばれたものである。指導期間とは、入寮してからの三十五

日間のことをいい、寮内での過ごし方、言葉遣い、法要所作、掃除の仕方などこれからの僧道生活の一番の基礎になることを指導してもらえる期間である。これが大変厳しいのである。入寮式の日、あんなに丁寧で優しく荷物の搬入を手伝ってくれた先輩は、翌日からもういなくなった。鬼のような形相へと変わり、あの優しくした姿を見ることは二度となかった。勿論、私は右も左もわからない、正座も五分ともたないような状態であったので、毎日が新鮮なことばかりであり、辛いものでもあった。しかしこの指導期間の中で多くの大切なことに気づかされることになる。指導期間を終えると親への電話が許可される。その電話では涙で一言も喋ることができなかつたことを、いまでも思い出す。今まで私はどれだけ親に支えてもらってき

星祭（ほしまつり）
と言う単語を初めて聞く人は七夕のようなロマンチックなお祭りを思い浮かべるようだ。
私も子どもの頃は、夜に行われるこのお祭りを、漠然となんだか素敵な名前のお祭りだなと思っていたが、実際に参加してみるとお経を誦し続ける、と

☆☆☆☆星のたより☆☆☆☆

ても渋いお祭りだ。
当山では新たな季節が始まる節分の日に星祭を行うが、これは運命を司る妙見様を筆頭に様々な天空の神様を勧請して今年一年の厄をはらい運氣を高めるためのお祭りだ。
年に一度、星々を祀る大切な日に、精一杯祈りたい。
U.K

たんだと思うと感謝の気持ちがいっぱいで涙を抑えることができなかつたのである。そこで私は初めて、親から受けていた恩を知ることができたのである。
「知恩報恩」恩を知って恩に報いる、それは普段何気なく生活をしている中で、知らず知らずのうちに受けているものが多いかもしれない。私たちはできるだけそれに気づき、報いていきたいものである。

俳壇 (みのり)

寒行のお題目響く山の滝
柄杓では割れぬ御手洗の厚氷
ちよんちよんと瓦敷ふか寒雀
豆撒くや父母在りし日の奥座敷
冬枯の街の灯遠くまたたきぬ

暦のあれこれ

暦と人々(六)
暦に縛られなかつた有名な戦国大名といえは豊臣秀吉もその一人です。
多くの合戦に勝利した秀吉は、暦をうまく扱っていたようです。
天正十年(一五八二)本能寺の変で織田信長が倒され、姫路から京都までわずか五日間で行軍したとされる「中国大返し」の時の事です。
軍師が姫路城から出陣する日は二度と帰ってこられない悪日だから止めるべきだと進言すると、秀吉は「私は主君信長公の為に討ち死にする覚悟であり、この城には二度と帰ってこない。また、私が勝利すれば何処にでも城を構える事が出来るからここに帰ってくる必要も無い。この悪日は私には吉日である」と答えたそうです。悪日を吉日として士気を高めた秀吉。暦をうまく利用した演出が天下人への第一歩だったのです。